

第九回 美しい日本語で詩を聴く会

朗読詩集 2024.1.27

お題「約束」



古い恋唄

有馬 敲

聞けよ AI

春名江吏子

光

村田 辰夫

紅さし指

すみくらまりこ

遠い約束

上村多恵子

桜へ

すみくらまりこ

石ころ

武西 良和

誓いの事

下田喜久美

霧の中

加納 由将

ちいさいひとよ

北原 千代

約束

もみにゃーじ

指輪

波野 仁

ミノル君

清水崇彦

死の谷を歩く

長岡 紀子

約束の記憶

スノードロップ

私が大人びた子供だった頃 牧田久未

古い恋唄

有馬 敲

*

はじめての出会い

まだ打ちとけず ぎこちない

少ないことばのやりとりが

重たい沈黙を刻む

地上から吸い上げられて

人影のまばらな屋上に腰掛け

ジョッキーの泡立つ液体を

おもむろに流し込むとき

空中に投げ出された

目まいにちかいたときめきが

そこだけを浮き立たせて

暮れなずむ山肌が

しだいに闇のなかに埋もれ

眼下の町に灯がつきはじめる

*

毀したくなったら

ただ軽く触れるだけで

毀すことができるだろう

たぶん消すこともできるだろう

見えるか 見えないか

あの舞い散る粒子よりも小さい

軽い結晶を輝かせて

空中に漂っているみたい

出来上がったかたちが

両手をあわせて掬いと

しずかに肉眼でたしかめられたら

塗りこめられた闇のなかで

悲しいまでに透きとおる

白く美しいかたち

*

迷いこんだ雛を

両手で抱きあげたように

手のひらに体温を

なまあたかく感じている

なにげないまたたきにも

かるい指のしぐさにも

熱いときめきがつたわって

目まいがして

さし向かいに座る

シチューの湯気のむこうで

音もなく匙がうごき

噴水の落ちる川から

現実が裏返って

出合いの瞬間におぼれる

*

流れ落ちる水を

黙って流れている

いま なにかが終り

なにかが始まろうとしている

自然のほほえみも

しなやかなふるまいも

ことばを超えた意味をもってくる

卓上の重い沈黙

あふれる空気が抜き取られて

まわりのざわめきも

どこかへ吸い込まれてゆき

肩に肩をかさねるとき

人工の池の底に

空がさかしまに落ちかかる

*

かろうじて

巡り合ったとて

また別れねばならないことが
わかつているのに

いや それだから

語りつくさないまえに

語りつくしたように

おたがい口を閉ざしている

遠くからきたその肩越しに

向こう岸の電車が

なん台も往き来して

そのあいだを

床の下
の川がかすかに流れ
夜の瀬が白く光っていた

*

並んで立ち止まる

点滅する信号の前で

歩いてきた理由を

暗闇がただす

できることなら

もっと早く別れるべきなのに

引きはなせない力が

ここまで歩かせてきた

とりとめもないことばが

いまになつて ふいに

思い意味をうねらせてきて

はじかれたように

たがいに強く退けあつて

ひとときを立ちつくす

*

手のひらを重ねた

生身のぬくもりを忘れるな

作りごとではなく

ほんとうにあつたのだ

夜の暗がりに立ち止まり

さだかでない首筋を

わずかにかしげると

「さようなら また」

別れの挨拶が短い和音になつて

さびれた路上にひびき

ほろにがい羞恥をかくすように

別の方角へ背を向けて

大股で歩いていく

*

たとえ たった一度

それが造られたものでも

いつまでも美しいであろう

美しいものは

頭上を走る 稲妻か

地下の水の流れの奥の

人工の吹き上げの前で

一瞬射すくめられるとき

「さようなら お元気で」

とうとうに吐き出された

小さな声がよみがえり

たちまち過ぎる夕立ちを背に

北へ向かう電車のほうへ

小走りに消えてゆく

*

ふいの声

どこか遠いところから

海なりがかぶさって流れてくる

打ち返す波のひびき

見えない顔を描き

むこうから寄せてくるものを

たずね たしかめて

少ないことばをかえす

約束する しない

声を交わしているうちに

波の高鳴りがくりかえしてきて

黒い固まりを握りしめ

ひそかな悔いを背負って

しばらく 無言のままうつむく

光

村田辰夫

闇のなかを人間がゴソゴソ動いている
闇のなかだからブツカリ合い押し合い

争い 罪を生む

光は神だ 仏だ

これが浮世というものさ

それ以外は闇だ

この浮世をなんとか愉快にしようと

こんな単純な世界像を

銘々が動いているが

なぜ 見落としていたのか

神の光 仏の光を知らないものは

結局 闇の住人

神や仏の光がこの世にあるとき

ある場所を照らすことがあるが

隙間渡る太陽の光

それ以外はこの世の闇だ

月の光は太陽の光

神の光 仏の光のおこぼれ

遠い約束

上村多恵子

灰色のスイッチが消えると
もう何も聞こえなくなった

地球の回転とともに身体を躍らせ

たった一つだけ悔やむ

約束しておきながら

果たせなかったことを

それは一方的な

独りよがりの約束だったのかもしれない

しかし

行かなければならなかった

そこへ必ず

行かなければならなかった

そして告げたいことがあったのに

無念の言葉が

散り散りになって

すべりながら落下して

声にならない

叫びとなって

吸いとられてゆく

鏡の奥に何があったのかを

ようやく感じてきたのに

わかり始めてきたとき

風景が遠くなって

もう約束の場所へ

ゆけないまま消えてゆく

その時間がもう過ぎて

かなり過ぎて

もう誰もそこにはいないかもしれない

街の喧騒だけが回り

見知らぬ人達の

ぶしつけない笑い声だけが響き

約束した時間が

宙づりになって

冷い空気にゆらめいている

もう掻き消されるのだろうか

足跡さえも残せず

想い出の時間さえも

日常のさりげない動作の

ときおりの慰みの話題に

登場さえすれば

記憶の森の枯葉となって

いつしか還ってゆけるのか

土の中へと

残しておきたかった言葉は

締めながら

もう二度と開けられないドアの前で
影の背に沈む

いつしか果たしたかったし
いつかは果たせるものだ
なぜに信じて生きていたのだろう
すぐ手を伸ばしさえすれば
いつでも果たせたかもしれないのに

少女のときに住んでいた街が
そこは想い出さずに
長い間忘れようとしていたのに
狭い路地を抜けて

ホコリだらけの穴だらけの小路が
やたらと鮮明に

地図もない街をぬりかえて
約束していた場所と
いつしか重なり
会いたかった人の
後姿を追いかける

もう間に合わないのだけれど
約束することが
できたことだけでも
かすかな取柄だったと
立去りながら確かに感じている

石ころ

武西 良和

山すそに石ころが

一こ二こ

横を向いたり

あお向けになったり

これらはただの石ころだが

石垣を積むとき

大きな石では扱いきれない

小さなすき間を

ふさぐ

あちこちから

さまざまな形の小さな

石ころが集まって

大きな石の粗い仕事ではできない

こまやかな働きをして

石垣のすき間に

軽やかに収まっていく

ただの石ころだったものが

集まり

石垣のそれぞれの場所に

すっぽりと入る

それは子どもの石ころの
大人の仕事だ

誓いの事

下田喜久美

ある日私は誓いのために生きなければ
自分はないのだと悟った

一つの失敗は私をむなしくするように思ったのだ

この世で取り返しをつかない失敗はあると信じて
いた

人生が長いなど私には考えられなかった

その決意を知る人がいたのか私にはわからないが
あまりにも私の右 左は

平穏で優しかった それが

私を唯一生かしていた

それは家庭のぬくもりであった

外はやんやとはやし立て

何も知らないはずの子供が

お母さん「うそを言ったら閻魔様に下をぬかれる
の？」と聞いてきたりした。

私はうそを言えないから死を考えていたのだ

そうして私は生かされた

神経性胃炎で2か月の入院をして

帰ってきたときはみながやさしく迎えてくれた

た

公道への思い

あの日以来 詩の森の風穴に入って

私は近いの中で生活をし

何年たっても涙にぬれる心底の思いを

断ち切った刹那

誓いの宇宙で息をして暮らした

世界が私の中に入ってきて山の井の小さな村から

公道へとつながった誓い

マケドニアやルーマニア フィリッピンなどに行

誓いは私の血と涙の根源だったが

っては

私を生かしてくれた

詩人のミハイ・エミネスクや マゼランの人生をた

切っても切れない宇宙との赤い絆

どったりした

そしてすべてを満たしてくれたのは

何かが吹っ切れたのだ

何という不思議な慈悲の運航

囚われの 小さな枠から自由に飛び出させてくれ

今誓いは

私を満たしてくれる母なる女神そのもの

遠いきのうと遙かなる明日へと

導いてくれる道である

私 そのもののように

最後まで忘れまい

霧の中

加納 由将

会いたいと思った。記憶の片隅に響く声に惹かれて探し続ける。生まれつき方向音痴の僕は声を頼りに知らない街をさまよっている。誰にも気付かれない裏口でそっと交わされた約束はついに体内で腫れて破裂寸前まで膨らんで何処にも逃げ場をなくして自分で自分の体を抱きしめる。走り出した衝動、開けてはいけなかった扉なのかもしれない、もう遅い記憶の声は日増しに大きくなって言い聞かせる茶色い日々は続いていく。最近耳が聞こえづらくなり、声の方向が分からなくなる時があ

る。そういうときはただそこに座り込んで両手で耳をふさいでいる。しばらくすると声の方向が次第にはっきり聞こえ始める。足は動き始め声は次第に大きくなっていく。声の杖はくつきりとはっきりと太くなっていく。暗く見えなかった風景が見え始め違う自分に気が付いた。

ちいさいひとよ

北原千代

わたしのくちびるを　よく見てね
さわってみてね

「やくそく」

あなたの息のとおりみちが
しあわせでありますように

庭のツクサを添えて　ちいさいひとに手渡す
たいせつですから　失くさないでね

花

むらさきいろ

ぬれています

つめたいね

いま摘んだばかりです　みどりのはっぱ

耳でおぼえる

指でおぼえる

かたちでおぼえる

わたしはこゆびをさしだす

ちいさいひともさしだす

「やくそく」

やわらかいくちびるがはじめてそう真似たとき

わたしの泉はあたたかく濡れてあふれた

失くさないこと

ずっとおぼえていること

はじめての言葉をあなたに

あなたと囲む食卓が

苔のみどりにかわっても

そこに座っているのがみな

出会うことのない未来のひとばかりになったとしても

くちびるにさわって

音をたべて

あなたはおぼえる

庭の林檎の木の下で

きょうのみどりにそっとつつむ

「やくそく」

約束

もみにやーじ

ふわりと微笑んだ 君の眼差しが

閉じた心に ひらり 舞い込んだ

変わって行けるかな？ ぼくも少しずつ

青い空の下 笑ってみたい

瞳を凝らすから

どうかそこで見守っていて欲しい

歩き出す ぼくの挑戦を

一人きりなんかじゃないって

暗い夜を乗り越え その先には

まばゆい景色 開けるって

この心 支えて欲しい

道のりは長くて 挫折そうになる

弱さ 喉を締め付ける虚しさ

一つずつでいい 打ち勝っていこう

君の居る場所に ぼくも立ちたい

この手を伸ばすから

どうかそこで見守っていて欲しい

歩き出す ぼくの挑戦を

一人きりなんかじゃないって

立ち止まった時が流れ出して

感情が胸に満ちる日を

いつの日か 手繰り寄せるよ

生きて行く 君との約束…

指輪

波野 仁

ずりいゝずりずりずりいゝ

夜な夜な暈を

這うモノ寄り来る

ずりいゝずりずりずりいゝ

床（とこ）の縁まで躡（にじ）り寄り

濡れた髪を伸ばし

踵（きびす）に触れる

にゆるりとした触感

踵より脚を伝い

股間を弄（いじ）り

にゆるうゝにゆるにゆるにゆる

にゆるうゝ

腹を登り

胸から腕

やがて白くフヤケた指

痙攣と硬直が襲う

契約の指輪

黄金の呪い

約束の地は遠退き

拘束の痣（あざ）が

鮮（あざ）やかに広がり

魂の表皮から浸透し

萎縮とトラウマを刻み

指輪は妖しく

静かに

燦(きら)
めく

ミノル君

清水崇彦

六月も

もうすぐ終わる

休日だというのに

今日もビチョビチョと

長雨が降りつづく

そんな日の午後

ミノル君が 家に来た

ミノル君も小学六年

カサから水がたれる

遊ば

ごめん 今日はだめ

工作やってるから

何作ってんだ

日光写真

雑誌の付録の

そっか

じゃまたね

ウン 今度遊ば

工作あとで見せて

ああ

ミノル君は

そのまま帰って行つた

遊んであげれば

よかつたのに お母さんが

ポツリと言つた

ほんとうに そうだ

思いなおして あわてて

裏の窓に走つたけれど

ミノル君はずいぶん

遠いところを歩いていた

深い草むらの道に

ミノル君のカサがゆれる

黒くて大きな

大人のカサ こわれていて

ちよつとゆがんでいる

ミノル君は Y君の家に

よそから来て暮らした

どうしてひとりなのだろう

もしかして あの戦争で

家族とはぐれたのか

そして二学期になると

ミノル君はとつぜん

学校に来なくなった

転校したらしいでも

行き先は誰も知らない

あの梅雨の日の

いっしよに遊ぶ約束を

守らないまま別れた

さようならもう

謝ることもできない

ちよつぱり太めで気がやさしく

冬の寒い日にはいつも

ハナを二本たらししていた

今ごろどこにいるのかな

ときどき丸い笑顔を思いだす

死の谷を歩く

長岡紀子

部屋の中で今も伸び続けて四・五メートル

五十年も共に生きてきたゴムの樹の下で

私は横になっている

両手を上下すると

「精霊の衣」といわれる蝶になって

舞い上がる

ゴムの樹の間を 葉と葉の間を舞い

窓から静寂な月夜の空に向かって飛ぶ

眼下に広がる大地

平和と思えるが混沌の渦を巻く地

それでも緑の地はあちらこちらに残っている

戦いの争いの渦巻く地

残虐の屍と瓦礫が広がる

蝶は飛ぶ

ここは死の谷

俯いて 項垂れて 歩く人

清流の音が心を慰む

突然 白い天使が舞い降りて歌い

人々にやさしく白いマナを降らす

人々は 潤い歩き続ける

もう一筋の路にも人々が歩いている

ゴツゴツした岩に砕ける流れは激しい

黒い天使が舞い降りて黒いマナを降らす

人々は少し潤う 崩れて倒れる人も

まだ先は続くのか

ひとりひとり行きつくところまで歩く

私はゴムの樹の下で横たわっていた

呼吸も絶え絶え

脚も萎え

少し休む

ゴムの樹を 見つめて

マナ：旧約聖書 出エジプト記より

モーゼがエジプトで奴隷になっていたイスラエル人を

解放し苦難な旅をしている時

天から



降ってきた滋養のある食物

約束の記憶

スノードロップ

確かに約束したような気がする

けれど誰と約束したのだろう

本当に約束したのだろうか

いつ約束したのだろう

何を約束したというのだろうか

風に飛ばされた一本の糸をさがすような頼りない

記憶

けれどやっぱり約束したように思う

遠い過去

いやもつと前かもしれない

思い出したいけれど

あいまいで思い出せない

もう少しで手掛かりが見つかるような気がする

けれどやっぱり何なのかわからない

もしも約束したなら

誰かと約束したなら

向こうもさがしているだろうか

不安、期待、

それとも覚悟があるのだろうか

私が大人びた子供だった頃

牧田久未

私が大人びた子供だった頃

私は適度に病んでいた

言葉などという錠剤を

ポンポン心に放り込んでいた

懐かしいけど

恥ずかしい

この薬の独自の効き目を期待した

けれど

胃の中の錠剤はいつまでも溶けず

真夜中のポストでは季節の手紙が死んでいく

大人びた子供の遊び場

幼なじみと作ったお墓に赤い花が咲く

神様の御褒美は甘くて苦い

夕焼けの帰り道

いつまでもとけない言葉あそび

大人になろうとする頃

朝のポストでコトリと音がした

さつきまで心に張り付いていたような

生温かい言葉

忘れていた約束

大人という病の予感

効き目のある処方箋はまだ見つからない

(2011-20231009)

聞けよ AI

春名江吏子

英知の集積を一瞬に

私に決断を求める

AIはヒトを越えたか

最初は人工頭脳と言った

人工頭脳とは善根の徒

鉄腕アトムを想像した

人工とはヒトが創造

支配しヒトを超えず

頭脳とはヒトの頭の

限られた容量と寿命

AIと名前を変え

機械の限界を越え

深淵さと広大さと時の無限

ヒトは恐れたのか

記憶の集積 学究の鉤脈

ヒトは敗北を忘却の底に沈め

その呼び名がAIか

所詮

脳の神経シナプス

伝導のモデルを

極めたるヒトの申し子

よりよい生活を夢みて

AIは記憶を忘れない

地球の裏 宇宙の果て

集積しつづける

ヒトは命尽きる定め

AIの無限の働きを

我々は恐れるのか

ヒトよ 恐れることはない

約束しよう

失敗のくやし涙からの出発

友との誓いと団結と向上心

切磋琢磨 努力の宝珠

ヒトよ 憂えることはない

約束しよう

我々には燃えたぎる

熱き血潮と情熱が

脈々と脈打つではないか

AIを友とし

有史以来 初めての

幸福を手にいれよう

紅さし指

すみくらまりこむ

薬指、

それは親の指でなく、

人を指す指でもない。

それは挑みを誘う指でもなく、

約束を誓う指でもない。

それはもつとも無力な指。

紅さし指――

それは京女が秘やかに

紅をさす指。

桜へ

月は必ず満ち、

花は必ず咲く。

自然は約束を反故にしない。

桜よ

あなたに焦がれたのは

わたしだけではなかった。

夢世界へ続く

桜の小道。

人みなが宴する。

今宵、わたしも

淋（さび）しらに咲くあなたに会いに

川沿いを歩いて行こう。

非売品

二〇二四年一月二十七日

(C) 日本国際詩人協会